

自閉児と非自閉児の言語発達

平 松 芳 樹

(中 国 短 期 大 学)

目 的

幼児相談室を大学内に設置し、一般に開放しているが、これまでに来談したケースのほとんどが言語発達の問題を含んでいる。とくに最近では自閉または自閉傾向の子どもの相談が、かなり多い。

自閉児に関する研究は急速に進み、診断や治療の方法も多角的に試みられている。筆者らも、行動療法をとりいれて、自閉児の訓練を行なってきた。しかし、まだ日も浅く方法的にも試行錯誤の面があり十分とはいえない。今回の研究の目的は、自閉児の言語発達について、当相談室へ約1年間継続来談した2ケースを通して、その特質を分析し、発達の変化と訓練の効果を検討することにある。さらに、標準的発達をしている非自閉児の言語獲得の過程を調査したので、これを報告し、自閉児との比較を試みるものである。

方 法

(1) 対象・観察期間

1. D児 1976年6月生(男)。2歳11カ月時の1979年4月より1年間、月に1~2回来談した。その後は、通園施設を経て、現在、養護学校の一年生である。乳幼児精神発達質問紙(津守ら)で調べた発達指数(DQ)は、3歳時で55、4歳2カ月時で44であった。

2. E児 1976年9月生(男)。2歳9カ月時の1979年6月に初めて来室し1980年4月まで、月に1~2回来談した。近くの保育園に通園の後、現在は小学校一年生である。同上の質問紙でのDQは、2歳9カ月時で69、3歳11カ月時67であった。

3. K児 1981年1月生(女)。生後3カ月から1歳9カ月まで、月に2~3回家庭訪問して観察した。同上質問紙でのDQは、2歳8カ月時107、3歳2カ月時119であった。

(2) 観察記録と分析

D児とE児は、プレイルーム内の行動について、隣接した観察室のマジックミラーを通して、テレビカメラで撮影し、ビデオテープに収録した。分析はこのテープにより行なった。

K児の場合は、自宅の居間にテレビカメラを持ち込んで記録をとった。分析はビデオテープによって行なった。

結 果

1. D児の行動と言語

本児は二卵生双生児の兄として出生し、胎児期・出産期・乳児期とも特筆すべき問題はなく、順調に経過したということであるが、弟と比べてあまり手がかからなかったといい、ひとみしりをしなかったことに疑問がある。

来談当初、弟はすでに「パパ」「センセイ」などの単語が出ていた。おおむねえしながら「ハイ」と返事をするし、排便をことばで告げることができていた。しかし、本児は、「アー」という発声が時折出る程度で、無言でひとり遊びをすることが多く、多動であった。名前を呼ばれても反応はなく、無関心のものであった。保育園に通っていたが、目を離すところへ行くかわからない、サクを乗り越えたりして危険であるということなどで、通園をあきらめている。

相談室では、まず呼びかけに対する応答訓練から始めた。子どもの背後または横から名前を呼び、反応があれば一次強化子で強化する方法である。1日10試行とし、17日間訓練した。最終的には、名前を呼ばれると振り向いて「ハイ」と返事をするのが目標であるが、この時点では返事をするまでは至らなかった。しかし「振り向く」「振り向いて呼んだ人と目が合う」のレベルには達した。

表1 D児の言語発達

年齢	20分間の 発 声 数	単語 の 数	(%)	備考	要求や拒否 の発声数	(%)
3:0	20	0	(0)		3	(15)
3:2	15	0	(0)		9	(60)
3:5	15	0	(0)		3	(20)
3:7	87	0	(0)		40	(46)
3:9	64	0	(0)		32	(50)
3:10	45	0	(0)		31	(69)
4:2	56	8	(14)		12	(21)

本児はことばの獲得が遅いケースであるが、4歳2カ月の時点では、いくつかの単語が聞かれた。表1は20分間の発声数とその内容を分析し、発達の変化をみるものである。

3歳5カ月までは発声量がごく少ない。自分の要求や拒否を伝えるサインとして使うことも少ない。プレイルーム内では聞かれなかったが、3歳2カ月時に「パパ」といえたという。父を意味するのではなく、物をもらう合図のようであった。3歳7カ月では発声数が増え、意志を伝える手段としても効果的に使う。指示に従った行動がみられるようになり、発音を模倣しようとする傾向がみられた。3歳10カ月のころから、家族の人の顔写真を使って「パパはどれ」などと、質問しながら弁別と発音の訓練を開始した。4歳2カ月で、自分の名前を呼ばれて「ハイ」と返事をした。父の写真を区別して「パパ」といえた。これまでの単純な発声から、いくつかの音を組み合わせた発音遊びをするようになった。

2. E児の行動と言語

本児はM病院で自閉児と診断され、当相談室へ紹介されてきたケースである。身体的発達に標準的で、既往歴もなく順調であったが、名前を呼んでも応答しない、目を離すとどこへでも行ってしまふ、特定のものへの固執性がある、などが問題とされた。

表2 E児の言語発達

年齢	20分間の 発声数	単語 の数 (%)	備考	要求や拒否 の発声数 (%)
2:10	259	4 (2)		24 (9)
3:0	43	7 (16)		6 (14)
3:2	120	30 (25)		10 (8)
3:3	67	54 (81)		0 (0)
3:4	40	12 (30)		10 (25)
3:6	73	55 (75)		0 (0)
3:11	116	70 (60)		26 (22)

D児とは対照的に来談当初の発声数が多い。そして、発声のうち約30%が数唱らしきものであった。呼びかけ訓練でもほとんど応答がなく、発声を続けながら紙に数字などのいたずらがきをすることが多かった。「アー」とか「エー」という発声を伴って、セラピストにも書いてくれという意味の動作（クレーン行動）がみられた。3歳になって、「チョコ」「ジシャ（自動車）」などの単語が出はじめた。同時に発声数が減少した。指示に従った動作ができるようになってきた。そして「ハイ」と返事ができるようになってきた。3歳2～3カ月では、単語の数が増え、発声数に占める割合が増加している。ことばの内容も「アカ」「シロ」「サンカク」「マル」などの抽象的なものが多いが、「チョーダイ」「トッテー」などの要求を伝えることばが使えるようになった。行動にも落ちつきができて、呼びかけにも応答し、街中でも呼ばれ来るようになったという。3歳4カ月では、両親や兄が家に帰ると、喜んでまつわりつくようになり、動作の模倣もするようになった。「ホシイ」や「オイシイ」はいえるが、「イヤ」とか「ダメ」という拒絶のことばはいわない。3歳6カ月では、動作とことばの模倣が盛んで、獲得単語数がどんどん増えている。「オカアサン」「ニイサン」などとはいうが、本児が自発的に呼びかけることはない。家族の顔写真を使った弁別と「オトウサン」「オカアサン」の発声訓練を行なった。

保育園に通園をはじめた3歳11カ月時には、さらにことば数は増え、友だちとも遊べるようになったということである。しかし、友だちの名前をたずねると、口ではいわないで十数人の名前を紙に書いてこたえたそうである。プレイルームでの行動も、アニメの主人公の絵や数字、カタカナ、ひらがななどを書いて遊ぶことが多かった。

3. K児の行動と言語

自閉児と比較するために、標準的発達の本児の言語獲得の様子を観察した。

表3 K児の言語発達

年齢	20分間の 発声数	単語 の数 (%)	備考
0:4	72	0 (0)	名前を呼んでも応答ない
0:6	21	0 (0)	あやしかけに微笑と発声
0:8	47	19 (40)	「パパ」の模倣
0:10	114	33 (29)	「パパ」の発音遊び
1:0	138	15 (11)	「ママ」5, 「パパ」5
1:2	104	42 (40)	「ママ」17, 「パパ」20
1:4	120	16 (13)	「ママ」6, 「パパ」4
1:6	181	95 (52)	「ママ」3, 「オーバーチャ」6
1:9	178	120 (67)	「オーバーチャン」20 など

4～6カ月では、「アー」と発声することが多く、「ウー」「イヤー」なども聞かれるが、単語はまだない。いないいないばあに対して微笑し、発声して応答することがあった。8カ月時にはじめて「パパ」と言ったが、これはおおむがえしに模倣したものである。10カ月でも「パパ」が盛んに使われるが、発音遊びの意味が強い。いないいないばあの「パー」も模倣した。1歳で「ママ」が言えだした。筆者に向けて「パパ」と呼びかける。むすんでひらいてなどの指示に従った動作、いわゆる芸ができるようになった。1歳2カ月では、名前を呼ばれると「ハイ」と返事をするようになった。1歳4カ月で、動作やことばの模倣がよくみられるようになり、ことばの種類も増えた。1歳6カ月では、発声中の有意義語の割合が過半数となった。同じことばを何度も続けてくりかえしていることがあり、発音を楽しみながら練習しているようである。1歳9カ月では、ほとんどが有意義語となり、まわりのおとなと会話ができるようになった。

考 察

言語の獲得にとって、人との応答性が重要であることはいうまでもないことであるが、言語獲得期の子どもにとって、自分の名前を呼ばれて「ハイ」と返事をする、および、父や母に呼びかけることが、その後の言語発達の重要なカギとなるように考えられる。返事や呼びかけのあらわれるころ模倣が盛んであり、発音遊びの中でくりかえし練習して、有意義語を自分のものにしていくと考えられる。

自閉児などの言語発達に遅れのみられる子どもには、まず呼びかけ訓練が欠かせない。そして、当相談室で試みたような家族の写真を用いた弁別訓練と「パパ」「ママ」あるいは「オトウサン」「オカアサン」と呼ばせる訓練は、効果があったと考えられる。親たちは自分の子どもから呼びかけられることを強く願っているのである。